令和元年度川越市学力向上研究委員会授業研究部中学校国語部会の取組①

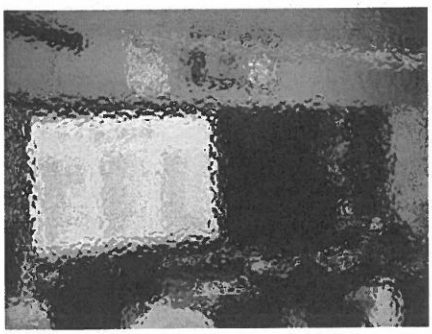
1　授業研究テーマ「主体的・対話的で深い学びを展開するためのモデル授業実践」
※「学び合い高め合いのある授業づくり」を実現するため、上記のテーマとした

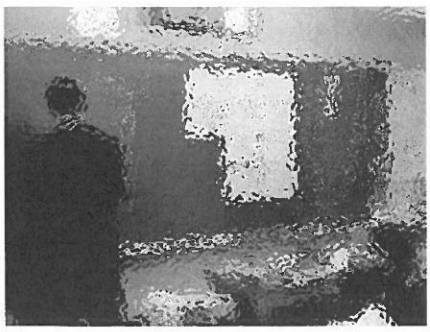
2　実施日・会場　　令和元年１０月２９日（火）

3　授業者反省　川越市立野田中学校
○　まとめの時間に教師が話しすぎないように意識した
○　本時のクロストークの内容は適切だったか
○　ＩＣＴの活用についても適切だったか

4　研究協議
Ａグループ
・ジグソー班の編制、ＩＣＴによる時間や座席の表示は有効であった
・書画カメラで生徒のワークシートを映したが見づらかった点は課題
・ふり返りは何ができるようになったかを書かせたい
Ｂグループ
・教科書の本文を生徒が積極的に読み込んでいた
・エキスパート班の活動を見届ける手立てが必要
・ジグソー班で活動した意義に気付かせることが重要

5　指導講評
・ジグソー班のメンバー分けを意図的に行ったことは学習効果を高めた
・エキスパート活動、ジグソー活動はあくまでも手段（目的ではない）
・「対話的な授業」は相手意識と目的意識をもたせることが重要
・「対話的な授業」では、テキストとの対話も重要
・発表の際には、話形を活用することで自信をもってスムーズに展開できる
・市の学力向上プラン及び県の重点・努力点等も活用し、「主体的、対話的で深い学び」の実現を今後も図ること





令和元年度川越市学力向上研究委員会授業研究部中学校国語部会の取組②

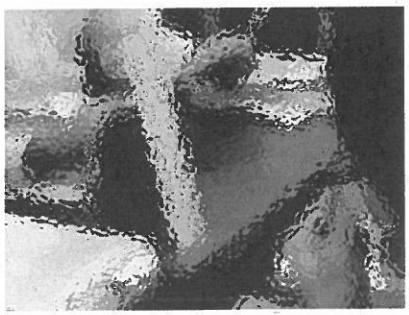
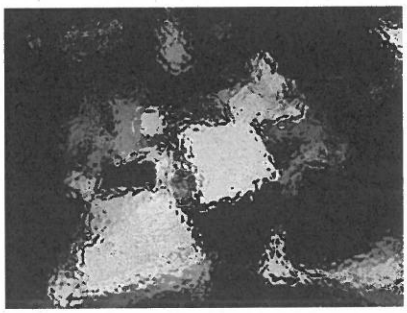
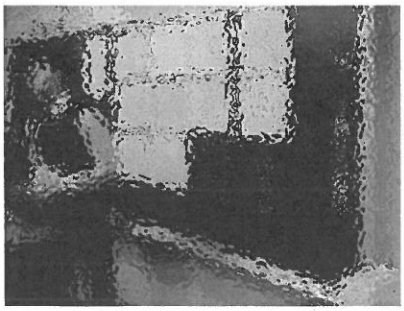
1　授業研究テーマ「主体的・対話的で深い学びを展開するためのモデル授業実践」
※「学び合い高め合いのある授業づくり」を実現するため、上記のテーマとした

2　実施日・会場　　令和元年１１月２９日（金）川越市立霞ケ関東中学校

3　授業者反省　　川越市立霞ケ関東中学校
○　根拠をもとに説明する活動を子ども達は熱心に取り組んだ
○　子ども達の解答が偏ったのは最初の指導で使用した出典によるところが大きい

4　研究協議
Ａグループ
・ワークシートの構成は、生徒の思考が整理できるものとなっていた
・課題の難易度が高い分、ヒントが示されると取り組みやすい
・エキスパート活動で和歌の特徴まで話し合っておけるとよい
Ｂグループ
・ワークシートが取り組みやすく、発表の話型も示されているのはよい
・正解を発表し合う場面では、全体で和歌の意味を整理し、再考できるとよい
・１つの和歌だけ提示し、３つの和歌集のどれかを話し合うのもよいと感じた

5　指導講評
・学習指導要領上では古典に関する記述は少ないが、「古典の世界に親しむ」ことが記されており、親しめたかどうかが授業の鍵となる
・３つの和歌集がそれぞれ成立するまでに約２００年の間があり、成立したときの時代背景等の違いを生徒に実感させることが大事
・封筒を使った演出や図書館資料を活用した歌の選定、座席表の活用など、随所に工夫が見られ、生徒が一人で考える時間の確保もできていた
・単元の始めと終わりでのふり返りの内容で変容がみられることが深い学びへとつながることである
・話合い活動で発表原稿の読み合いではなく本当の対話が見られたか（対話とは言葉のかけ合いを通して新たに生まれるもの）
・短冊に書かせた和歌を生かして発表し合う工夫があるとよい（一部のグループで見られたように短冊を立てて相手に示しながら語る等）

令和元年度　学力向上研究委員会　中学校社会科部会　活動報告

今年度のテーマ

社会科における「単元を通した学習モデル」の提案

テーマ設定の背景（市内中学校社会科教員へのアンケート結果か

【実態】

川越市で働く中学校社会科教員は約５０名。うち約半数が１０年未満の教員である。

【アンケート結果より（複数回答があったものを抜粋）】

・効果的な「主体的・対話的で深い学び」の授業実践のあり方が知りたい。

・「単元開き（第１時）」の授業展開について知りたい。

→「単元を貫く課題」の設定の仕方について。

・「単元のまとめ」の時間における、「まとめ」と「振り返り」のあり方について知りたい。

・授業準備に係る資料の収集、精選、活用について効率的かつ効果的な方法を知りたい。

上記の実態とアンケート結果から…

１．若手からベテランまで教員が自分の実践を振り返るきっかけとなり、かつ、授業改善の一助となる「授業モデル」を提案することで、教員一人一人の授業力向上を目指す。

→一つの単元「単元開き」・「展開」・「単元のまとめ」を３人の教員で授業実践を実施。

２．グッドモデルとなる授業の指導案や資料を教員間で共有するシステムを構築することで、授業力向上を目指す。

→文書管理に川越市内の教員が誰でも活用できるフォルダを作成。

以上の２点を目標として、今年度は「単元を通した授業モデル」を提案することとした。

単元開きのポイントと「単元を貫く課題」の設

１．「単元開き」において、これから学習していく単元に興味関心を抱かせていく工夫

・生徒の知識や経験から意見が出やすいテーマから入る。

・生徒がイメージを抱きやすい身近な話題から入る。

・学習内容に関係するアンケート結果、データを活用する。

例①公民：「東京オリンピック」をテーマにして、オリンピックを迎える川越市の現状を捉え、オリンピック大会後も含めた、川越市の課題を考える。

例②公民：「川越市の観光」テーマにして、観光アンケートの結果をもとに、持続可能な観光都市にするための街づくりについて考える。

例③地理：複数の資料から〇〇州のイメージをウェビングマップに表現させ、どのような「特色」のある地域か大観させる。

例④歴史：その時代の結末を最初に生徒に知らせる。そのような結末にどうしてなっていったのかを予想させる。

2．「単元を貫く課題」をどのように設定するか

・複数の社会科教員で意見を出し合い「単元を貫く課題」を設定した時は、単元が終わるときに、納得のいく単元となる場合が多い。
→指導案や教材資料と同じように「単元を貫く課題」も教員間で共有できるとよい。

・生徒からキーワードを出させて、それを活用し教員が責任を持って設定する。

・キーワードを埋めるだけのひな型を教員が作成し、「単元を貫く課題」を設定する。
→「川越市の〇〇を改善するためには？」※〇〇にキーワードを入れる。

「単元のまとめ」のポイントと「まとめ」と「振り返

1．「単元を貫く課題」に正対する「単元のまとめ」となる。

・単元を貫く課題を設定する際は、その「単元のまとめ」まで見据えて設定する。

2．「まとめ」と「振り返り」について

・「まとめ」と「振り返り」の違いがはっきりしていない授業も多い。

・まとめ方のポイント、振り返りの仕方を活動前に示すことで、生徒の活動がスムーズに行われる。

●「まとめ」　：事実の整理。課題に対する答え。
「本時のめあて」と正対している。
生徒の言葉やグループでのまとめを活用する。
教員が主導となって全体で共有するもの。

●「振り返り」：生徒一人一人の学習の捉えなおし。
→学んだことをどう生かせるか。
→学んだことが自分自身とどうつながるか。
生徒が個人個人で考えていくもの。
何ができるようになったか。→　振り返りを通して実感できる。

※「学びの地図」の活用：単元の見通しと毎時間の振り返りを記入することで自己の変容が分かる。

社会科（公民：地方自治）における行政（市役所等）職員の活用につ

1．活用パターンごとの成果（○）と課題（▲）

①該当する授業時に「ゲストティーチャー」として来校してもらうパターン

○実際に最前線で働いている人の意見を聞くことにより、生徒の考えを、さらに深めることができた。生徒の考えが、「抽象」からより一層「具体」になった。

○自分たちの考えた課題に対する解決策を、直接評価してもらうことで、「自分たちの考えが生かされるかもしれない」という期待と学習意欲につながった。

▲打ち合わせ回数が多くなるので、話すポイントを絞って打ち合わせをする。

▲ゲストティーチャーと、うまく絡みながら授業を展開する。役割分担の確認。

②生徒の考えた案を市役所各課に送付し、意見をもらい、練り直すパターン

○担当各課から専門的な意見をもらい、生徒の思考の深まりが見られた。

○担当各課からもらった意見を参考に練り直し、自分たちの考えを「市民意見箱」へ投函し、市長に見てもらうことができた。「もしかしたら自分たちの考えたことが実現してもらえるかもしれない」という期待が学習意欲につながった。

○市役所各課とは手紙でのやり取りだったので、学校側の負担は少なかった。

▲市役所各課に生徒の活動の趣旨が伝わりにくかった部分があったので、数件、学校に問い合わせがあった。

▲「授業として予定している時間」と「担当各課からの返答までの時間」に開きがあったため、単元のまとまりとしては離れてしまった。（返答が来るまで、他の単元に移ったため）※１週間でほしいところだったが１ヶ月近くかかった。

→ただ、生徒は返信をもらい、嬉しかったようで意欲的に活動を行っていた。

2．活用までの流れ

①該当する授業時に「ゲストティーチャー」として来校してもらうパターン

（１）管理職を通して教育指導課に連絡をする。

（２）分野、単元、授業内容、どのような場面で活用するのかを指導主事と共有。

（３）該当する市役所担当課に依頼、概要説明をする。

※教育指導課から依頼をするので、各学校から直接連絡しない。

（４）担当課と教員、指導主事で打ち合わせを数回実施する。

※この段階では、直接、担当課と教科担当教員で連絡をしあう場合もある。

（５）授業日、該当校に、担当課職員がゲストティーチャーとして来校してもらい、授業を実践する。

②生徒の考えた案を市役所各課に送付し、意見をもらい、練り直すパターン

（１）管理職を通して教育指導課に連絡をする。

（２）分野、単元、授業内容、どのような場面で活用するのかを指導主事と共有。

（３）該当する市役所担当課に生徒の考えた案等を持参し依頼する。

※教育指導課から依頼をするので、各学校から直接連絡しない。

（４）市役所担当課から回答を受け取る。

※できるだけ早い回答をお願いするが、時期（議会月）や依頼数によって回答まで時間がかかることもある。

（５）専門的なアドバイスをもとに、生徒が授業で考えた案を練り直す。

（６）その後、生徒の考えた案を「市民意見箱」「市長への手紙」という形で、市役所に投函し、活動の成果を行政側に報告することもできる。

※必ずしもではないが、生徒の活動の成果を見てもらう一つの方法である。

中学校数学科モデル授業プラン

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改

課題解決に向けた話し合い活動の充実～小集団活動の取組～

授業実践校の取組例

○自分の考えをきちんと順序立てて説明することのできる生徒と基礎的・基本的な学習内容が定着しきれていない生徒がいる

○理由をあげて自分の考えを説明できる生徒は限られており、根拠をあげながら筋道を立てて自分の言葉で他者に伝えることが不得意な生徒が多い

そこで

・２～３人の小集団を編成し、問題を解けた生徒が、できていない生徒に教えられるような授業形態をとる。

・そうすることで、分からないからと意欲を失ってしまうことを避けるとともに、問題を解けた生徒が教えることで更なる理解・定着を図れるようにする。

・自分の考えと他の生徒の考えと比べ、また、教え合う活動により理解を深める。

・ただし、教え合いばかりにならぬよう、自力解決の時間もきちんと確保しつつ、小集団活動を効果的に取り入れていく。

【グループ編成について】

グループは、生活班をもとに編成し、課題について、分かった事・気がついた事・つまずいている事等をお互いに伝え合い、補完し、学習を進めていく。特に進め方等のルール（進行役・発表の方法等）は設けていない。

これは、数学の授業だけに限らず、日常の学級経営の中で、様々な課題解決に向けて小集団の話し合い活動を軸に取り組んでいるため、その授業だけのルールを設けなくとも、生徒は普段の通り小集団での活動をスムーズに進められる。普段の学級経営と教員と生徒の信頼関係が礎となっている。

研究協議より

○グループ活動、話し合い活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりするための方策について

・話し合いの視点を明確にする。（形式的にグループにして、とりあえず話し合うような時間では深まらない）

・見通しの時間に自分の考えをしっかりと持たせてから、話し合いを始める。どこまで分かっていて、どこが分からないか（特に分からないこと）を伝えられるようにする。

・答えを教え合うのではなく、どうやって考えたのかを教え合うことをしっかりと抑えることが大切である。

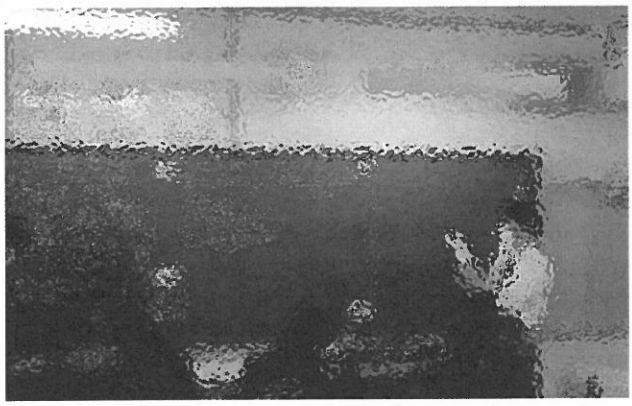
指導講評

○「生徒の言葉を生かす」「子どもたちの実態を把握する」ことを意識した授業とすること。

○解決できているグループには、発展的な課題を用意し、より深い学びを与えること。

○分からない生徒も分からないといえる雰囲気の醸成が必要である。学級経営の充実が授業改善につながる。

○小学校・中学校で授業スタイル等について研修していると思う。児童・生徒の細や



【参加者の感想】

☆見通しを持たせた授業内容で、わかりやすかった。今後は、苦手な生徒へのかかわり方やその手立てについて、自校で研究したいと思う。

☆グループ学習で充実した話し合いとするためには、お互いの考えをしっかりと聞き合える環境を整える必要があると思った。

☆板書が授業の流れをしっかりと示していたので、生徒は考えを整理しやすかったと思う。今後の参考としたい。

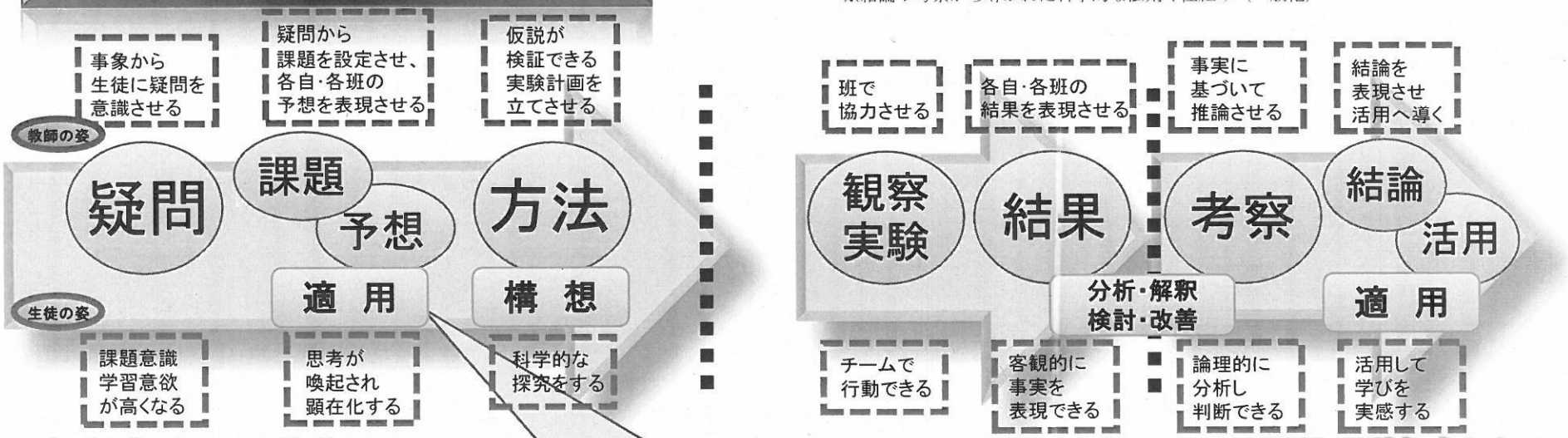
☆発問が端的かつ的確であり、生徒の思考を促すきっかけとなっていた。

☆授業のゴールが明確に示されており、生徒にどんな力を身に付けさせたいのか、また、生徒の変容がみられた授業であった。

中学校理科モデル授業プラン

複数時間で問題解決を展開し 活用力・探究的な学びを確保する授業プラン ～予想や考察の場面でじっくり考えさせる授業の展開へ～

※結果：観察や実験から得られたデータ（事実）
※考察：事実を客観的にとらえ、合理的に判断し結論に導くプロセス
※結論：考察から導かれた科学的な法則や仕組み（一般化）



モデル授業プランの具現化

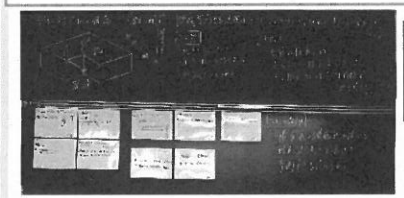
中学校理科部会では、平成28年度より、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善のための授業展開を考え、公開授業を実施してきた。

大切なことは、生徒がじっくりと予想を立てたり、考察したりする場面を設定することである。そのため、モデル授業プランでは、これまで1時間で展開していた題材を複数時間で展開し、より探究する時間を確保し、生徒の活用力を育成することとした。すべての授業を複数時間で展開することには無理があるため、生徒の実態に合わせ、意図的・計画的に年間指導計画に位置づけ、実施していくことが望ましい。

令和元年度は、「大地の成り立ちと変化」の授業で、緊急地震速報の仕組みを題材とし、地震の揺れの大きさや伝わり方の規則性について、生徒自身に「バネ」に触れさせながら体感的に見いださせる活動を取り入れることで、生徒自身が思考・判断・表現する場面を設定した。

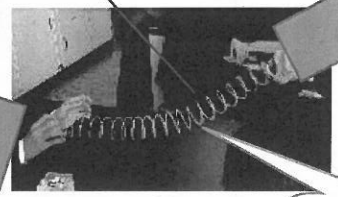
公開授業の様子

【課題】緊急地震速報は、どうしてこれから大きな地震が起こることが分かるのだろうか



揺らし方によって、バネの揺れ方に違いがあることに気付かせるようにする。

気が付いたことをホワイトボードに書くことで可視化する。その後、全体で考えを共有する。



揺れの大きさや伝わり方の規則性について体感的に考えられる場面を設定する。（本時では「バネ」を利用）

揺らし方によって、バネの動きが違うことが、地震の揺れにも何か関係があるのかも？！

揺らし方を変えると、端から端までの伝わる“速さ”がちがう？！

“縦”に揺れたときと“横”に揺れたときで、伝わり方の“速さ”がちがったよね！

理科部会からの提案

令和元年度 学力向上研究委員会 理科部会では、別紙「本時の授業について」というシートを作成した。

これは、「生徒の体験」「既習事項」「学習指導要領」「年間指導計画のポイント」「本時の授業（つけたい力）」「指導観」「本時の学習」という項目から成り立っており、指導案作成前に記入することで、見通しをもって授業を行うことができる。

別紙

本時の授業について

第２分野　（２）大地の成り立ちと変化　(ｳ)火山と地震　ｲ　地震の伝わり方と地球内部の動き

生徒の体験	・　地震が伝わる前に、小さい揺れがあったかもしれない。 ・　地震が伝わる前に、スマホが鳴ることがある。でも、鳴らないこともある。（緊急地震速報を知っている。）　など

既習事項	（小６） ①　大地にずれ（断層）が生じると、地震が起きる。 ②　地震が起きると、地割れが起きたり、崖崩れが起きたりして、大地の様子（土地）が変化する。

学習指導要領（略）	(ｳ)火山と地震　ｲ　地震の伝わり方と地球内部の動き ①　自身の体験や記録を基に、 ②　**その揺れの大きさや伝わり方の規則性に気付く**とともに、 ③　地震の原因を地球内部の働きと関連付けて理解し、 ④　地震に伴う土地の変化を理解すること。

年間計画の作成のポイント	・子どもたちが、直接体験している地震は何か？ ・その地震の記録を子どもたちと共有できるか？ ・地震の揺れを表すモデル実験は可能か？ もしできないなら映像教材にするか？

本時の授業つけたい力	**地震のゆれには縦波と横波があることに気付き、それをもとに緊急地震速報の仕組みについて考え、説明することができる。**

指導観	【発見型】実験や観察を行い、生徒自身に気付かせる。 【検証型】生徒が予想したり、教師が教えたことを、実験や観察で確かめる。

本時の学習（例示）	課題提示：緊急地震速報は、どうしてこれから大きな地震が起きることがわかるのだろうか？ ①　課題について、その理由を予想する。 【予想】地震のゆれは、同心円状に広がるから、ある程度の予測はできる。 ②　プラスチックのばねを使って、地震のゆれのモデルを表してみる。『地震のゆれの特徴は何か？？』 ③　班活動：地震のゆれの特徴を見いだし、意見を出し合う。 ④　本時のまとめ：地震のゆれには縦波と横波がある。その速度には違いがある。その特徴を使えば、地震の到着を予測できるかもしれない。 ⑤　学習評価Ｃの生徒への手立て

令和元年度　学力向上研究委員会　中学校部会　授業研究部　（英語）

1　研究主題

「学び合い・高め合い」のある授業づくり
「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善

H２９	→	H３０	→	R１
Output するための Input を補うための帯活動の実践		「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた「動機付け」「達成感」「自主性」に着目した授業実践		

2　「動機付け」「達成感」「自主性」への着目について

生徒の学力向上

【動機付け】
定着の前提として、生徒自身が「学びたい」「身につけたい」と思えること
知識・技能

【達成感】
お互いを認め合い表現できる環境を通じて、生徒が「達成感」を感じられること
思考力、判断力、表現力

【自主性】
学習サイクルの習慣化が基礎学力の向上につながると考え、家庭学習とリンクさせること
学びに向かう力、人間性

3　授業改善のための取組

（１）埼玉県学力・学習状況調査（以下、県学調）の質問紙調査の項目を参考とした「学習についてのアンケート」の実施（授業改善を検証するための指標として設定）

学習についてのアンケート（実施日：　月　日）　　年　組　番：氏名

●次の１～１０の質問を読み、最も当てはまるところに○を書きましょう。

No.	質　問	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
1	勉強するときは、最後に友達と答え合わせをするようにする。				
2	勉強していてわからないところがあったら、先生にきく。				
3	勉強でわからないところがあったら、友達にその答えをきく。				
4	勉強でわからないところがあったら、友達に勉強のやり方をきく。				
5	勉強のできる友達と、同じやり方で勉強する。				
6	先生の話や友達の発表をしっかり聞き、自分の考えを伝えることができていますか。				
7	(英語の)授業で、友達と英語を使って活動することで、新しい英語の表現を使えるようになりましたか。				
8	(英語の)授業で、自分や友達の考えや気持ちなどについて、英語で聞く、話す、読む、書くなどの活動に積極的に取り組みましたか。				
9	(英語の)授業で、英語を使って活動することで、自分も英語を使ってみたいと思うようになりましたか。				
10	学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含みます）	1. 4時間以上　2. 3時間以上, 4時間より少ない　3. 2時間以上, 3時間より少ない　4. 1時間以上, 2時間より少ない　5. 1時間より少ない　6. 全くしない			
11	土曜日や日曜日など学校が休みの日に、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含みます）	1. 4時間以上　2. 3時間以上, 4時間より少ない　3. 2時間以上, 3時間より少ない　4. 1時間以上, 2時間より少ない　5. 1時間より少ない　6. 全くしない			

（２）Ａ中学校における実践と生徒の変容

本年度の県学調の結果から、基本的な内容が十分に定着していない生徒が多いのではないかと推測された。そこで、授業において生徒同士が協働する場面や生徒自身が英語で表現をする機会を増やし、以下の３点に重点を置き、基礎基本と協働学習の土台づくりに取り組んだ。

①生徒が新出文法事項を理解しやすいように、既習事項と結びつけて導入する。
②生徒同士が協働して課題を解決する機会を授業中に多く設けて学び合いを促す。
③毎回の授業内で教員が生徒一人一人の活動の様子を見取り、フィードバックを与える。

※具体例は、別紙指導案を参照。

授業改善を進める中で、検証のための指標とするために行った（１）のアンケート調査（中学３年生対象）では、以下のような変容が見られた。

Ｑ７(英語の)授業で、友達と英語を使って活動することで、新しい英語の表現を使えるようになりましたか。					
４月	３６．２％	７月	５３．２％（４月比＋１７．０％）	１２月	６１．３％（４月比＋２５．１％）
Ｑ８(英語の)授業で、自分や友達の考えや気持ちなどについて、英語で聞く、話す、読む、書くなどの活動に積極的に取り組みましたか。					
４月	３７．９％	７月	５３．２％（４月比＋１５．３％）	１２月	７２．１％（４月比＋３４．２％）

※質問項目に「当てはまる」と回答した者の割合（％）

重点項目を意識した授業実践により、４月当初の状況に比べ、２学期末の１２月時点では大きく変化していることが読み取れる。これは、生徒の学力向上を願い、教師が意識的に授業改善に取り組んだ結果、生徒自身が協働学習の意義や重要性を認識し、自身の学力の高まりを実感できるようになったものと分析できる。

また、授業開始時の Warm-up として継続してきた帯活動の中で、初見の英文を読み込む練習を繰り返した成果も見られ、川越市中学生学力調査における対話文読解と長文読解の得点率が上昇し、本市の平均値に近づいてきたことも成果と言える。

４　課題

▲英語の授業における「まとめ」と「振り返り」を効果的に行う方法について、モデルプランにおいて本市のスタンダードとして示せると良い。

▲県学調の分析結果を、さらに授業改善に生かすにはどうするべきか。

▲検証のための指標として設定した「学習についてのアンケート」を、多くの学校で定期的に実施することについて。

▲学力向上研究委員会と川越市教育研究会外国語部が連携し、今後も授業研究会を一本化することはできないか。

▲教科レベルにおける小中連携を推進し、互いの学習内容・指導内容を確実に把握すること。

家庭学習部

令和元年度学力向上研究委員会（家庭学習部会）研究テーマ

「自ら学ぶ力」「学び続けようとする意志」につながる家庭学習の充

1　授業実践

（小学校）　令和元年１２月　６日（金）　川越市立武蔵野小学校

（中学校）　令和元年１２月１３日（金）　川越市立大東中学校

2　授業者の意図

小学校	中学校
○学力向上のためには、家庭学習が大切であり、学級活動（３）で話し合い、考えることで、学習意欲を高めることができる。 ○事前アンケートでは、家庭学習の意義や目的を意識できるよう項目を工夫した。 ○考える視点を、児童の言葉から出るようにする。→出ない場合は教師が提示する。	○学力が低いのは家庭学習の取り組み方に課題があると捉え、学級活動（３）で効果的な学習方法を話し合い、行動できるようにしたい。 ○「学習することは権利である」など、学習習慣の大切さを日常的に指導している。 ○小グループでの話し合い方や発表の仕方を事前指導することで、より活発な意見交換ができる。

3　研究協議

視点①　本時の授業より【学級活動（３）の授業の在り方】

小学校	中学校
○「さぐる」段階で、いかに自分事としてとらえられるかが大切である。 →全員が発表すれば、一人一人がしっかりと考えられるとともに、友達との違いも見付けられるのではないか。 ○「見つける」段階で、視点を示していたので、児童が考えを持ちやすかった。 ○学活（３）は児童、活発な意見交換をすることができる。	○先輩へのアンケートやインタビューという身近な資料を提示したことで、生徒が自分事として捉えられた。 ○「見つける」段階で、教師が具体的に書くよう助言したことで、実践可能な方法を話し合うことができた。 ○Ｙ字チャートは、方策を分類するとともに、実現可能かどうかを視覚的に捉えることができるので、効果的だった。

視点②　学力向上に向けて【効果的な家庭学習】

小学校	中学校
○学習支援サービス「ｅライブラリアドバンス」を活用するのがよい。 ○保護者用「家庭学習の手引き」があるとよい。 ○よりよい家庭学習を行うために、学校での	○家庭学習について、全校統一のガイダンスがあるとよい。 ○家庭学習の取組の様子を、月１回で「学び通信」等で発信する。 ○提出を可視化したり、確認の方法を工夫し

声かけをし、家庭の協力を得られるようにする。 ○家庭学習をいかに楽しめるかが学習意欲を高め、学力向上につながるだろう。	たりするとよい。 ○発達段階に合わせた家庭学習ができるとよい。 発達段階に合わせた家庭学習のあ

4　指導講評

（小学校・中学校）

小学校	中学校
○児童が前向きで、学級の状態のよさが表れている。 ○学活（３）は「なりたい自分・自分らしさ」がキーワードである。 ○（２）と（３）では、「何をどう改善していくか（指導）」、「今の学びがどうつながるか（将来）」という違いがある。 ○発達段階に合わせて考える「将来」が変わってくる。 低・・・身近な将来（明日・来週） 中・・・よりよい自分へ（より具体的） 高・・・将来の自分（中学生へ） ○キャリア形成のためにも、６年生の１２月は時期としてよい。冬休みにもつながる。	○教師の豊かな表情で生徒が引きつけられている。 ○「つかむ」段階では、学ぶことの意義に気付き、自分の課題を明確にすることが大事である。 ○「さぐる」段階では、自分事として捉えられるかが大事である。可能性への気付きを促すことで、具体的な意思決定につながる。 ○「見つける」段階では、役割分担を明確にしておき、指示を明確に行ったことで、小グループでの話合いが活発になった。 ○家庭学習への取り組みとして共有すべき価値は、「自己管理」「自己理解、課題解決」「協働」である。

5　参加者の主な感想

○学級活動（３）の授業をとおして、家庭学習の意義や価値を子どもたちに考えさせることは、非常によい取組だと感じました。

○アンケートなど、説得力のある情報を提示することで、子どももよく考え、自分の学習法と見直せるのだと感じました。本校でも参考にさせていただきます。

○学校生活の中で「学ぶことの意義」や「自ら考え学ぼうとする姿勢」、「自己実現に向けてひたむきに努力を重ねられる子どもたち」を育成していけるかどうかが大切だと思いました。

○思考ツール（Ｙ字チャート）は付箋を動かせるところが子どもにとっては話合いを活性化できるよいものだということが分かりました。

○授業の中で、子どもたちが自分たちの学力を知った上で、どのようにこれからの生活をしていけばいいかが目に見える形で分かり、子どもたちも授業に参加しやすかったと思います。